（第3種郵便物認可）

読売俳壇

矢島渚男 選

何がある雉が二山越えて消ゆ　香芝市　中村　鈴

【評】何があったのだろう。どうしたんだ。キジがこともあろうに山を二つも越えて飛んで行った。雉の季語は春でケンケンと鳴く声をもって春季とされているのにそれを無視している。それが面白い。

棘こそが生きてる証薔薇の花　行橋市　野田　文子

【評】私は薔薇を愛したドイツ詩人リルケが薔薇の棘に刺されて死んだという俗説で事実痛いしバラが恐ろしい。感受性はいろいろで、詩としてどちらが上か分からない。

葉一枚ついててうれしサクランボ　神奈川県　石原美枝子

【評】「ついてて」の「て」の重なりが理屈の「て」を越えて面白い。

夏草に隠れてしまふ隣かな　京都府　山田　国雄

でで虫を剝がさず帰る父の墓　鹿児島市　鶴屋　洋子

つつましき暮らしながらも初鰹　久喜市　深沢ふさ江

母なるは寂しかりけり桐の花　吹田市　堀田恵美子

等高線に沿ひて棚田の植田かな　長野県　村田　実

鳴き合へる郭公の声重ならず　調布市　浅野　文男

次世代へ戦なき世をこどもの日　八王子市　徳永　松雄

高野ムツオ 選

猿が来る子熊が来るわ山毛欅若葉　津市　中山　道春

【評】厳冬を乗り越えた猿や生まれたばかりの子熊の飢えを迎えてくれたのは柔らかい山毛欅の若葉。夢中になって貪る。「来る」「来るわ」から野生の躍動が伝わる。

母の日や母の寝顔の記憶なく　土浦市　今泉　準一

【評】母は子の寝顔を常に見ている。子が見ていることはまれ。母は日夜なく懸命に働く。子がそれに気づくのは多くは母を亡くした後か。

結局は薬談義となる円座　松山市　三木須磨夫

【評】顔見知りの老人。涼風に吹かれながらの取り留めない話。家族のこと、趣味のこと、やがて、体調のこと。そして妙薬の話題となる。

億年の空より続く春の空　千葉市　小林　昭

帰りには踏み潰されしかたつむり　川越市　大野宥之介

星屑の何時の間にやら螢に　柏市　藤嶋　務

籐椅子の向き星空へ替へにけり　香川県　福家　市子

残りたる代田に映る空の青　日立市　菊池　風峰

蛍の闇の深さや衣川　川崎市　西　順子

そら豆を喰みて青空広げたり　山梨県　一瀬　利彦

正木ゆう子 選

亀の子の池に着けるを見届けし　あきる野市　戸田　幸雄

【評】池に辿り着こうとする亀の子を、先日私も見たばかり。公園の通路だったので、少し手を貸して、見守った。作者も同じ体験をされたのかも。生き物たちの誕生の季節。

刻みたるパセリ包丁もてすくふ　大阪市　今井　文雄

【評】切る・剝くだけでなく、俎の上で寄せたり、掬って鍋に移したり。包丁は働き者。パセリの微塵切だって、一片も残さず綺麗に掬える。

こはごはとパセリを載せるアルバイト　加古川市　石村　まい

【評】皿にパセリを添えるだけ。それだけのことに緊張する場面だろうか。パセリの置き方ひとつにも練習が必要。こんな事も俳句になる。

河川敷を葵祭とならびゆく　長岡京市　みつきみすず

夏至という何か頂き登りつめ　前橋市　西村　晃

君逝くかあじさいはまだ白いまま　八王子市　中野美保子

たっぷりと話を聞いて豆ご飯　大和高田市　鮫島しょうん

豆飯に一品で足る玉子焼　大津市　竹村　哲男

初鰹皿は地元の笠間焼　下妻市　神郡　貢

花石榴風の摘花にまかせけり　三原市　天崎　千寿

小澤　實 選

青鷺に蛇呑まれゆく尾を振って　京都市　足立　紀子

【評】青鷺が蛇を捕えて、そのまま呑みおろしてゆく。「尾を振って」がたしかな描写だ。大きな蛇ではなかろうが、蛇だけでなく、青鷺もまた、のどが苦しそうである。

蜥蜴の尾蟻の進路を妨げぬ　大洲市　城戸　通宗

【評】この蜥蜴の尾は胴体から離れたものでも、死んだ蜥蜴のものでもないはず。そのようなものだったら、蟻は果敢に運ぼうとするはずだ。

振向いて逃げる蜥蜴のくねる縞　大津市　星野　暁

【評】振り向いて、我の様子を見ながら逃げていく蜥蜴である。その背中の縞がくねっているというのだ。動いているものを描きとっている。

出走馬のうねるしむら風光る　神戸市　山口　誠

万緑の中や阿修羅に憂ひあり　つくば市　小林　浦波

遠雷や説明会のパイプ椅子　京都市　根来美知代

古九谷に明石の蛸の薄造り　大阪市　貝田ひでを

鳳梨や今宵酢豚を輝かす　東京都　森　一平

アスパラガス少年兵が弾除けに　館林市　坂口　穣

水虫も痛風持ちも亡父譲り　千葉市　石野　勤

短歌あれこれ　錦見映理子（歌人・小説家）

映画

週に一度は映画館に行く。大抵一人だが、昨日は歌人の盛田志保子さんを誘った。

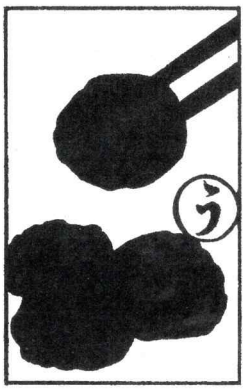
盛田さんは九歳下で、初めて会った時は大学生だった。短歌を始めた時期が近く、今は同じ結社の仲間でもある。

でも、プライベートで会うようになったのは最近だ。彼女も映画が好きなことを知って、一緒に見るのに相応しい気がする作品を見つけると誘っている。

長年歌を読み合っているから、内面を深く知っている感覚がある。昨日見たのはハリウッドスターを目指す女優が主人公の「マキシーン」で、血みどろの場面もあるホラーだが、彼女なら大丈夫な気がした。映画館を出てすぐ、面白かった、と彼女はやはり言った。お茶を飲みつつ、映画の感想から互いの親についてや好きなスターのことまで、縦横に語り合った。

今を割り今をかじるとこんな血があふれるだろう砂漠のざくろ

盛田志保子『木曜日』



題字デザイン・イラスト　福田美蘭